ハーバーサイド・ラグジュアリー

ハーバーグランド香港

ホテルからのハーバービュー

2013年ワールド・ラグジュアリー・ホテル・アワードにおける
ラグジュアリーシティホテル部門2年連続受賞はじめ、
2009年の開業より栄えある数々の賞を20以上受賞している
5ツ星ホテル・ハーバーグランド香港は、
ハーバーフロントに位置し828の全客室からヴィクトリア湾の
眺望を楽しんで頂けます。またミニキッチンを備えたお部屋・
スイートは長期滞在にも最適です。
総面積12,685平方フィート（約1,178m²）の会議室及び宴会場と、
5つのレストランを館内に備えております。
特別なイベント・ご宿泊に是非御利用下さい。

香港 ノースポイント オイルストリート23号
(MTRフォートレスヒル駅・A出口)
電話：(852) 2121 2688　ファックス：(852) 2121 2699
電子メール：hghk@harbourgrand.com　www.harbourgrand.com

ハーバープラザ東京事務所
スプリングホテルアンド リゾート内〒107-0062
東京都港区南青山4-16-10　オーク南青山102号室
電話番号：(03) 5413 5780　ファックス：(03) 5413 5786
電子メール：rep.tokyo@harbour-plaza.com

HARBOUR GRAND
HONG KONG
港島海逸君悅酒店

A member of Harbour Plaza Hotels and Resorts
A Hutchison Whampoa and Cheung Kong (Holdings) Company

SUMMIT

JAPAN HONG KONG

飛龍 FLYING DRAGON

日本香港協会ニュース ……No.75

日港学生交流の一断面　「尖閣」で逆転ディベート

香港大学准教授　中野嘉子

このところ香港大学に来る日本人学生達に勢いがある。日本と香港の学生交流では、長年香港の片思いが懸案だった。

今から13年前の2000年に私が香港大に赴任した時、日本と香港の交換留学生数は、頭を抱えたくなるような不均衡ぶり。香港の大学生は、子供の頃からアニメなどを入り口に日本に興味を深め、いそいそと日本津々浦々に留学していく。しかし日本の大学生は、なかなか留学先に香港を選んでくれなかった。

ご存知の通り香港大では、ほとんどの授業を英語で行っている。だから留学の条件が、TOEFL550点以上とやや高い。しかし、それだけ英語力があれば、留学の王道であるアメリカやイギリスに行ける。

一方、中国に興味のある学生たちは、やはり北京や上海を目指す。本場の中国語で学び、国も理解したいと言われると、中国の南に位置する香港は霞んでしまう。

ところが2004年にイギリスから世界大学ランキングなる、怪しげなものが出てきた。すると旧イギリス植民地で、英語発信力と国際対応力の高い香港大学は、アジアのトップを争うようになる。それが本当に教育の質を反映しているかどうかはさておき、「アジアでトップクラス」の看板につられて、香港大には中国大陸からとびきり優秀な学生が集まるようになった。

教授陣のグローバル化も進んだ。既に1997年の返還前から教員を世界中から公募していたが、現在では国籍が50カ国以上。しかも国境をいくつも越えて生きてきた、トランスナショナルな人が多い。

学生の国籍も80カ国を越えた。本科生の他に毎年約1000人の交換留学生が240の提携校からやってくる。10年前には学生の名簿は、ほとんどが香港人だったのだから、ずいぶん様変わりをしたものだ。

そしてできあがったのは、2万人がありとあらゆる訛りの英語で話すキャンパス。そこは絶対的な価値観を追うのではなく、毎日が価値観のすり合わせという一大実験場だ。

尖閣・日中逆転ディベート

そこに日本からも気骨のある留学生がやってきて、なかなかおもしろいことをしでかす。今年、なんといっても感心したのは、尖閣諸島を巡る領土問題を、建設的なディベートに仕立て上げた石川和華(わか)ちゃんだ。東京の国際基督教大から香港大へ１年交換留学に来ていた女子学生で、北京生まれ。名前には日中の架け橋になってほしいというご両親の思いが込められているらしい。

その和華ちゃんから、春節の頃メールが届いた。 学生主催で尖閣問題を論じるディベートをしたいので、どう進めたらよいか、相談にのってほしいという。

これには前段がある。去年の秋、香港大で中国史を教えている先生が、クラスで尖閣ディベートを始めた。中国東北部の出身で、イガグリ頭の万年青年。「日中の氷を溶かすのが大学人のあるべき姿、一緒に何ができるか考えましょう」と、まっすぐまじめな人だ。

イガグリさんは、クラスの学生たちを日本側と中国側に分け、尖閣諸島の領有権は、日本と中国のどちらにあるのか討論させた。日本側の弁論も中国系の学生が担当。判定は僅差で日本側が勝った。(2ページに続く)

目　次

2013年12月 発行

日港学生交流の一断面　「尖閣」で逆転ディベート …… 1
香港財界人との交流(4)　T.K.アン（安子介）さんのこと …… 3
香港の国際性 …… 4
連合会・各協会便り
　連合会：「第14回香港フォーラム」＆「全国協会交流会」開催報告
　　「世界中小企業エキスポ」と「イノベーション・デザイン＆テクノロジー・エキスポ」 …… 6
　書評“オーストラリア歴史・地理紀行”と私の捕鯨雑感 …… 8
　東　京：<人気レストラン香港人シェフによる広東料理実演と試食会>
　　主催女子プロジェクト「バウヒニア会」 …… 9
　関　西：香港・中国ビジネスセミナー開催、文化部懇親行事 …… 10
　中　京：秋季ビジネスセミナーと愛知名所巡りの旅 …… 11
　九　州：講演会・会員交流会開催 …… 12
　北海道：「海外おみやげ宅配便」～HOP1の取り組み～ …… 13
　宮　城：東日本大震災チャリティ・コンサート「響きあう心Part3」、
　　HKTDC FOOD EXPO 2013(美食博覧)に参加してきました
　沖　縄：香港で沖縄フェアー開催 …… 15
　広　島：初めての海外取引セミナー＆相談会in東広島、
　　広島日本香港協会ビジネスセミナー …… 16
　新　潟：新潟県酒造組合が「香港インターナショナル･ワイン＆
　　スピリッツ・フェア2013」に参加 …… 17
ハーバーグランド香港のご案内 …… 18

和華ちゃんはこれを耳にした。以前からディベーターだった彼女は、これをもう一歩発展させ、「逆転ディベート」にしたいと思いついた。中国の立場を日本人学生が、日本の立場を中国系の学生たちが論じるというもの。目的は相互理解。相手の立場に同意できなくても、理解できれば、そこから対応の幅が広がる。日中で立場を逆転して、なぜこれほどまで見解に隔たりが出てきたのか、体で感じようという試みだ。

がんばり屋さんの和華ちゃんは、「China Study Society(國事學會)」という同好会の委員会で１人外国人の委員だった。会議でディベートの主催を持ちかけると、「釣魚島だけは勘弁してくれ」という人もいた。逆に日本人留学生には、「中国側に立つなんて･･･」と渋る人もいた。しかし、和華ちゃんはそんな仲間を説得して歩く。自分は主催者に徹し、ディベーターを集め、開催へ向けて一歩一歩足場を固めて行った。

そして4月のある土曜日、「日本が釣魚、中国が尖閣ー相互理解のために」が開催された。 各チーム５人で、言語は英語。中国人の学生が日本側、日本人学生が中国側に立ち、熱弁をふるう。そして形式はディベートだが、あえて勝ち負けは決めない。

しかし、圧倒的に勢いがあったのは、日本の立場で議論した中国人チームだった。とにかく話の運びがうまい。それぞれ５人の持ち味を生かした分業体制も絶妙だ。

たとえば、各論を担当した３人は、１人目が中国出身の文学部の女学生。尖閣を発見したのは誰かを考える。中国政府は明国の使節に関する記録などから中国が最初に発見したと主張する。これに対し、彼女は、使節を先導したのは琉球の民らしいとする説を持ってきて切り崩す。

２人目は、これまた中国出身で法学部の学生。彼は国際法を武器に、１８９５年以降の日本の尖閣統治は合法であると展開した。

３人目の学生はマカオ出身で民主派。尖閣は民主主義国家が統治すべきだと、超変化球を投げてきた。

驚いたことに、中国人チーム５人は、当日初めて顔を合わせたという。打ち合わせは全てネット上でしたらしい。しかし、物怖じせず、語り口に勢いがあり、聞いていて説得力がある。

対する日本人チームは、折目正しく年代順に歴史文献を積み上げて議論を展開する。何度も勉強会を繰り返したというだけあり、知識は十分。最前列で聞いていて、「ほぉ、君たちやるじゃないの」と、胸が熱くなった。

ところが質疑応答になると、中国人チームのうまさが際立った。法学部くんは、まるでアメリカの法廷ドラマみたいに、「イエスかノーか」と襲いかかり、日本人５人はタジタジ。チームで顔を見合わせて、なかなか答えが英語で出てこない。

それでもこのディベートは、相互理解への価値あるイベント。おそらく東京でも北京でもない南の香港で、日本語でも中国語でもないニュートラルな英語だからできたことだろう。私を含めた評者や聴衆に褒められて、握手と拍手の閉会となった。

その晩、ディベートに参加した高村浩貴くんからメールが届いた。茨城出身の生まじめな慶応ボーイで、交換留学で香港大に来ている。

「中野先生、僕の気持ちを素直に言うと、今は悔しくてたまりません。結構時間を費やして準備したつもりでも、いざ実際にやってみると相手側とのレベルの差をまざまざと見せつけられて終わってしまいました」

彼は、なるべく早く私の正直な感想を聞きたいという。拍手を浴びてもいい気にならず、反省しようなんて、これは立派。

そんなわけで浩貴の熱意にほだされて、その３日後の朝８時にディベート反省会を開催。今回の日本人チームのおりこうさんの正攻法からいかに脱皮をするか青空教室とあいなりました。

そして夏になり、１年のプログラムを終えて交換留学生たちは帰国。しかし、日本でも難題とまっすぐ向き合い、成長を続ける様子が伝わってくる。浩貴はインターン先で、発展途上国の人々に小口融資をし、自立につなげる「マイクロ･ファイナンス」の啓蒙活動に全力投球。和華ちゃんは、その後国際交流のプロになりたいと、東大の公共政策大学院を目指し、合格。

そして、ディベーターの１人だった神戸大の大石貴之くんは、卒論のテーマに尖閣を選び、中国人の指導教官についたという。

彼からのメールにおもわず口角が上がった。「普通に生活して自分の国のメディアに触れ、自分の国の視点から問題を見ていれば、その国の主張を当然のように支持し、そうでない意見を持つ人々と対立していくのは仕方のない流れなのかもしれませんが、その中で、敢えて既存の考え方から離れて、相手の立場になって考えてみようとする姿勢は、衝突を乗り越えていく上でとても大切な事だと思います。

香港という場所は、比較的それがしやすい環境だったのかもしれません」

東大生が体験学習

東西をつないできた香港。そこにある大学だからこそ、できることは何かと考えている。

そして夏には、東大の園田茂人先生と香港大ー東大合同サマープログラムを立ち上げた。東大生20人が香港大生と一緒に「香港の中の日本」を学ぶ、２週間の体験学習。海外で実学をする大実験だが、現場を訪ねるプログラムに東大生の瞳がキラキラしていた。

グローバル人材は国境を越えて、産学を越えてみんなで育てるのが理想型。これも、香港貿易発展局、香港日本人商工会議所、香港和僑会など多方面から、温かいご支援をいただいた賜物だ。

そして、このサマープログラムの参加者の中から、東大から香港大へ、そして香港大から東大へも長期の交換留学の志願者が出た。実現すれば史上初。日港の学生交流は、また一歩前へ進む。

香港 いま・むかし

香港財界人との交流(4) T.K.アン（安子介）さんのこと

日本香港協会会長 戝前 宏

今年1月31日のSouth China Morning Postの記事に“It's not too early to discuss Hong Kong's 2047 promise”なる記事が出た。英･中協定と香港基本法が出来てほぼ四半世紀となるが、2047年まで現状が保てるのかという問題提起だ。一方、鄧小平が言ったように50年もすれば中国の生活水準も香港並みになるとの見方はどうなのか。確かに一部の都市は香港以上に高層ビルが林立し、実際に富裕層も増えている。

しかしあと30数年で中国が香港のレベルに到達するとは思えない。私が驚いた最近の事例では乳幼児向け粉ミルクがある。2008年のメラミン混入で中国産粉乳は危険だと消費者が海外産に走るのは当然かと思っていたが、香港･マカオでは買い占め騒動でパニックとなった。香港政府としては自由貿易の原則を崩すわけにも行かず、1日2缶に制限したが、並行輸入業者はあらゆる手段で持ち込みが絶えなかった。ヒト、モノ、カネの交流は歓迎すべきことだが、このようなモノの一方通行が起こるとは想像もしなかった。

前置きが長くなったが、本題のアンさんの話だ。T.K.アン(安子介　上海生まれ2000年死去)さんは読者の皆さんに馴染みは薄いかもしれないが80年代香港総商会を率いて、基本法の香港側起草委員会(Basic Law Drafting Committee)の委員長として大活躍された仁だ。共産党革命時上海を逃れ香港で繊維企業を興し大成功を収めた。彼の率いるWinsor Industrial Groupの社外役員を私はやっていたので毎月役員会の後でアンさんからいろいろ教えて頂いた。語学の天才で英、仏、独、スペイン語をこなし当時からCracking the Chinese Puzzles(漢字を学ぶ人にとっての教科書の如きもの)といった本を出し実業家というより学者のような印象がある。私とは英語で話したが、日本語も上手であった。基本法は私の香港赴任時点では既に完成していたので、むしろ苦労話しとか今後の問題点についていろいろ話してくれた。One country, two systems(この言葉はアンさんが造ったと言われていた)をどのように謳うかに最も腐心されたようだが、私の場合、ロンドンにも駐在していたので、マン島が女王を君主としつつ独自の政府と議会をもち、防衛や外交は英国政府任せという今の香港のひな形を見ていたので理解は簡単であった。しかし中国内でしかも共産党幹部に理解させるには大変なことであったろうと思った。

当時繊維産業はある意味で最も進んでいて中国以外にアジア各国、アフリカなどに工場を設営していた。一つには米国などで繊維製品国別輸入割当制度があり、アジアはもとより、アフリカ、中南米などに製造拠点を拡大していた。パキスタンにサッカー場が二つ入るほどの大工場が出来たとアンさんは喜んでいた。80年代終わりの改革開放政策によって深センは経済特区となったが、深セン以外の広東省の奥に工場を持つべきと説明されていた。その後の珠江デルタでの委託加工貿易の原型はアンさん他の香港繊維企業首脳は既に検討に入っていたのではないかと思う。彼の97年以降の心配はヒト、モノ、カネの交流が進んで共産党政権が色々な形で香港に入って来るであろうが、北京側も香港側もお互いに干渉せずに共存すべきだと説いていた。前述の育児用粉ミルクの例はモノが一方的に外に流れ香港人の一般生活に影響を及ぼした例だが、香港籍を取るため出産に香港の病院を利用するとか本土の小学生が香港の小学校に通い、香港の小学校の校舎不足など既に色々なケースが出ている。本土の高度成長期には外に現れなかった問題が今後は続発することも考えられる。あの頃、旧ソ連の崩壊の前兆が始まっていた。この点では私の方が情報を持っていたので色々議論したが、アンさんは旧ソ連の崩壊は必至と思っていたようだ。

その後の中国の高度成長は不動産投資と輸出に頼ることとなったが、何れも香港企業の得意分野ではあった。予想外に中央地方を問わず現政権を支える連中が(元々カネの魅力は熟知していたが)香港の利用法を知ってしまったことが今後の問題となってゆくであろう。冒頭で30年たっても中国が香港のレベルに到達し得ないと書いたが、香港ではrule of lawは空気のようなものだが、法というものに対する概念があまりにも違いすぎるというアンさんの鋭い指摘を覚えている。このような時こそアンさんのような知恵に期待したいのだが、2000年に亡くなってしまった。80年代はジャパンバッシングの時代でアンさんも心配しておられた。香港から見ているとMITI(通産省)が表に立って今の中国高官のように原理原則を並べ立てていたが、確かにこれではバッシングされてしまう。アンさんには日本の役所は省の縦割りで我々のように情報の共有がないので、それぞれの部署で原理原則を主張するためバッシングされると説明したが果たして理解されたか。

筆者は香港から北京に転勤し、ある日、内蒙古のフフホト市に夫婦で招かれた。夕食時、女性の副市長は文革の時いかにひどい目にあったかを話してくれたのが印象に残っている。翌日、大競技場で相撲力士の格闘技と馬術競技を見ていたら、大観覧席の上の方から筆者の名前を呼ぶ人がいる。まさかこんな地の果てで知り合いが？と思っていたらアンさん一行であった。アンさんも香港と北京の知り合いが、こんな北のフフホトでと驚いていた。

香港いま・むかし

香港の国際性

（一財）世界政経調査会国際情勢研究所所長　折田正樹　元香港総領事

1　香港は世界で最も国際的な都市と言って良いであろう。香港を散策してみると、尖沙咀のウオーターフロント・プロムナードを気楽に歩いても、スターフェリーやピークトラムに乗っても、ショッピング・モールで買い物をしても、香港人の他、多くの異なる国の人々とすれ違い、また、居合わせる。本土大陸の中国人、フィリピン人、イギリス人、アメリカ人、オーストラリア人、タイ人、インド人、日本人などなど様々である。住民、旅行者が全く遠慮なく自分の言葉を声高にしゃべっている。中国語と言っても、広東語、普通話と言われる標準語、上海語など、英語にしても、香港英語、クイーンズ・イングリシュ、アメリカ英語、シンガポール英語、スコットランド英語、オーストラリア英語を耳にし、時々日本語も耳に入る。日曜日の朝のセントラルではタガログ語をしゃべる人々で一杯になる。香港は、普段からそれぞれの人が自分は多様な国際社会に身を置いているのだと感じるところである。　私が総領事として香港に滞在した返還前の1992年から94年と比較してみても、普通話の占める割合が増えたとは感じるが、大きくは変っていない。

2　香港の国際性は日常生活を遥かに超えている。企業の経済活動、個人の知的、文化的交流は国境、地域を超えて、国際的に自由に展開され、成果を出している。

最近の香港経済の実績を経済数値で見てみよう。世界の経済統計の多くは、香港を中国本土と別記している。国民総生産はタイよりは小さいが、マレーシア、シンガポールとほとんど肩を並べ、フィリピン、ベトナムよりは遥かに大きい。一人当たりの国民総生産では、アジアでは、シンガポール、日本、ブルネイに次いで第４位、韓国より高く、中国の約6倍である。外貨準備高では、世界で第7位、アジアでは中国、日本、韓国に次いで第４位の大きさである。(以上、2012年、2013年IMF資料)

スイスに本拠を置く「世界フォーラム」が毎年行っている世界各国地域の国際競争力に関する最近の調査(「制度」「インフラ」「教育」などを指標化して集計し、各国地域の競争力に順位を付けている)の2013年の発表では、香港はアジアでは世界第2位のシンガポールに次いで第7位となっており、日本の第9位、韓国の第25位、中国の第29位より上位になっている。日本経済研究センターが行う潜在競争力調査では、今後十年間に一人当たりの国民総生産がどれだけ増加する可能性があるかを「国際化」「企業」「教育」「金融」「政府」「科学」「インフラ」「IT」の８分野の指標を分析し、各国地域の順位付けをしているが、2011年の発表では、香港は総合で第１位となっており、分野別では「国際化」と「金融」で第１位、「企業」「インフラ」で第２位、「IT」で第３位となっている(日本は総合で第14位、「国際化」で第18位、「金融」で第42位。　中国は総合第34位、「国際化」で第11位、「金融」で第27位。米国は総合で第3位、「国際化」で第2位、「金融」で第28位)。

人口はわずか約７百万、面積は圧倒的に小さい地域である香港が、多数の国々と比して大変素晴らしい経済的な実績を上げているのである。香港経済は、この実績を見ても、中国本土、日本そして他国と比較して質の高い効率的なものあると言えるのではないか。なかでも私が注目するのは「国際化」の分野で他の国を引き離して高いレベルにあることである。あの小さな地域が世界中の企業の金融センターとして世界の資金と中国やアジア諸国の資金の橋渡しの役割も果たし、ITセンター、物流センターとして、また、企業の司令塔などとして、中国とアジアを世界に結び付け、日々国際的な活動をしている成果である。香港では、返還後も中国語とともに英語は引き続き公用語であり、香港での経済活動は、中国語とともに世界の共通語たる英語で行うことができるという強みがある。香港経済はその強みを活かして、中国本土やアジア各国の大きな発展を背景に成果を上げていると言えよう。香港は、世界の企業が中国に入り、中国の企業が世界に出るための大きな国際化されたゲートウェイとしての機能を果たし中国本土との相互依存関係を深めながら、経済を発展させてきたのである。

3　香港の経済活動は「一国二制度」下に行われている。香港が1997年に英国より社会主義国中国に返還され中国の主権下の「特別行政区」として再出発した後も、外交や国防は別として基本的には従来の資本主義制度と生活様式が保持されて、経済活動は外国企業も含め自由な活動が認められている。香港の国際性は返還後も維持されるだけでなく、それから16年経った現在、更に強固なものとなって輝きを増していると感じる。「一国二制度」を定める中国の国内法たる香港基本法は極めてユニークなもので、香港においては「社会主義の制度と政策を実施せず、従来の資本主義制度と生活様式を保持」し、この状況は「50年間変えない」と明記されている。香港は返還前から世界の中でも、経済活動に対する規制が少なく、税率は低く、英法系の「法の支配」が確立されているところであり、政府官僚組織の規模は小さく、汚職の防止・監視は厳重で、政府の清潔度及び透明度は高い。

返還前に香港に駐在した際に多くの香港の有識者と意見交換したときには、「一国二制度」と言っても返還後の香港について先はどうなるかわからないとか、大きく発展を遂げる中国経済に飲み込まれてしまうのではないかとか、上海のような都市に香港の役割が奪われてしまうのではないかとの懸念を述べる人がかなり多かった。しかし、その後の実績は困難なこともあったであろうが、それらを克服し、強靭性、

HKカップ英語コンテスト（前列左から３人目が筆者）

柔軟性を持って、香港らしさを失わず大きな成果をあげてきたと考える。自由経済活動とともに国際性は維持、強化されている。　香港と良く比較の対象とされてきた上海については、最近中国が上海を「自由貿易試験区」とするとの動きがあることが注目されるが、香港のあり方が大きな参考になっているのではないだろうか。香港の今後について考えてみると「一国二制度」の下での政治的な民主化の程度と速度の問題で中国政府との緊張が生じるとか、例えば、大気汚染等環境問題の解決などについて困難な問題が生じる可能性はあるにしても、これまでと同様困難を一つ一つ克服して行くことを期待したい。

4　香港の将来を考えるに当たって重要なポイントの一つは香港の人材育成の努力である。成熟した自由市場、グローバルに展開する経済活動に欠かせない法律家、経営管理の専門家、会計士、インベストメント・バンカー、ＩＴ技術者などの高度の国際的な人材の育成に大変な力を入れている。日本の大学では優秀なグローバル人材の育成を看板として掲げる大学が増えてきたが、香港ではグローバル人材の育成は当然のこととされている。

大学など教育機関の教育、研究のレベルは、国際的に極めて高い水準にある。2013年10月に発表されたタイムズ大学世界ランキング(2013-14)を見ると世界のトップ200大学の中に香港大学、香港科技大学、香港中文大学が挙がっている。合計で9しかない香港の大学のうちの実に3大学である。因みに日本は５大学、韓国は４大学、中国は2大学がリスト・アップされている。人口比率でみても香港の大学の国際水準の高さが伺われる。香港の大学は異文化の接点とも言われ、香港地域外の学生の受け入れに熱心で、学生全体の１４％は域外からと言われている。中国語、英語で勉強ができ、法律の分野では英法と中国法双方が勉強できる。学生は、勉強をしながら自然に国際的な環境に身を置くこととなる。大学進学前のインターナショナル・スクールも50近くもある。世界の主要大学との教育・研究のネットワークの構築にも極めて熱心である。

私が中央大学法学部で教壇に立っていた2011年に中央大学と香港大学の交流計画により、香港大学の学生チームが訪日し、中央大学の学生と意見交換を行った。香港側は香港人教授の引率の下、香港人の他、中国人、タイ人、ミャンマー人、ベトナム人の学生が参加し、日本人だけからなる日本側学生との間で英語で「日本の裁判員制度」の特徴点について英法の「陪審制」と比較しながら活発に議論が行われた。香港チームの知識、英語力、国際性と議論の能力の高さに大いに感心した。

5　日本の近くに位置し、経済的にも重要な役割を有している香港との関係の深化は日本にとっても重要であり、特に国際性の部分では日本より先を行っている香港から学ぶことが多いのではないか。そのような香港とはあらゆる分野で協力、交流を拡大すべきだろう。

なかでも学生等若者間の交流は重要である。大学間の交流、日本の学生の香港留学、香港の学生の日本留学を促進しなければならない。日本から見ると、学生の関心が中国本土には向いても、香港にはなかなか向いていないのではないかとやや心配であったが、最近大いに勇気付けられたのは昨年12月に香港代表部の主催で開催された香港杯全日本大学生英語スピーチコンテストの決勝大会であった。このコンテストは2007年以来毎年開催されているもので、私はゲスト・スピーカー及び審査員としてお招きを受け、香港の国際性について特別講演を行った。200名近くの応募者から、決勝に残った15名がスピーチを行って競った。いずれの学生も香港に強い関心を有し、多彩な面から論じており、内容の水準も高かった。

優勝した学生のスピーチは2011年東日本大震災の直後から香港紅十字などを通じた支援活動が活発に行われ、それが継続していることについて感謝を表明し、香港の有名な俳優など300名が岩手出身の宮澤賢治の「雨ニモマケズ」のタイトルのもと音楽ビデオを作成し、被災地を激励したことを述べ、思い遣りの精神は国境を超えるものであることを痛感したとし、国際的支援がある中で自分たちは辛くても頑張って行かなければならないとしたものであった。香港の素晴らしさ、国際交流の必要性と国際交流は自分の身近にあることを示すスピーチであった。

日本・香港関係の将来は若者が担って行くこととなる。双方の若者が相互に関心をもち、交流を深めて相互理解をはかり、寛容の精神、他の人を思い遣る精神を深めてほしいと願って止まない。

(2013年10月)

「第14回香港フォーラム」&「全国協会交流会」開催報告

日本香港協会 全国連合会 事務局

■第14回香港フォーラムにて、日本香港協会が5年連続“ベスト・アテンダンス・アワード”を受賞！

フェアウェル・ディナーにて
ベスト・アテンダンス・アワードの表彰を受ける日本香港協会

去る12月2日・3日、香港ビジネス協会世界連盟(Federation of Hong Kong Business Association Worldwide／本部＝香港貿易発展局内)の世界大会「香港フォーラム」が開催されました。第14回目の開催となった今年は、全世界から370名近くの会員が参加し、大盛況のうちに幕を閉じました。

今年のフォーラムも、日本全国の参加者が世界全体の総参加者数の30％以上を占める、総勢114名を数え、国別での参加者数が世界一となり、5年連続で“ベスト・アテンダンス・アワード”を受賞しました。

また、各協会の活動に対する受賞式では、世界各地からの多数の応募の中から、沖縄日本香港協会の申請した「アジア・フォーラム」が最も成果のあったイベントとして、アジア・オーストラリア地区のベスト・イニシェティブ・アワードを見事受賞しました。

12月3日-4日の2日間の会期中にはビジネスセミナー、パネルディスカッション、ワークショップ、ネットワーキングセッション、視察ツアー等多くのイベントが催されました。1日目のランチセミナーではChevalier International, NWS Holdingsなど有名企業のCEOが講演し、2日目のランチセミナーでは、香港特別行政区政府行政長官CY Leung氏が登壇されました。その他にも、アジアビジネスの中心に位置する香港企業から、AIA Group, OMA, BASFを代表する講演者や、香港でビジネスを成功させた海外からの企業家が成功談を語りました。また、企業訪問では、ソファーデザイン販売会社への訪問、旧啓徳国際空港の跡地に位置するKai Tak Cruiseターミナルなどへの訪問がありました。最終日のフェアウェル・ディナーでは世界中のメンバーが名刺交換をするなど国際的な交流が見られ、メンバー一同楽しいひと時を過ごしました。

香港フォーラムの前日の12月2日には、グランドホール(名爵)にて第2回全国協会交流会が開催されました。交流会に先立って全国連合会役員会が古田茂美事務局長の挨拶とともに開催されました。在香港日本総領事館石井哲也首席領事のご挨拶、つづいて全国連合会國場幸一会長が議長として選出され、第一回総会として今年一年の活動を振り返るとともに来年の新たな事業計画が討議されました。

全国交流会では本年の幹事であるNPO日本香港協会の進行のもと、全国連合会國場会長の開会挨拶、石井哲也首席領事からの来賓挨拶、ラルフ・チャウ香港貿易発展局プロダクト・プロモーション・ディレクターの乾杯の挨拶があり。香港に年一度の交流ということもあり、今年は120名以上の方に参加頂きました。また、今年新たに設立された新潟日本香港協会からも10名の皆様が参加されました。今年ご参加いただけなかった方は、是非来年ご出席いただき、メンバーとの交流を深めていただければと思います。

ベスト・イニシェティブ・アワードを受賞する沖縄日本香港協会

香港ビジネス協会世界連盟年次総会

香港ビジネス協会世界連盟年次総会

■「世界中小企業エキスポ」

12月5日より3日間にわたり、「世界中小企業エキスポ (WSMEE)」が開催されました。WSMEEには毎年世界各国の中小企業がビジネスソリューションと海外市場開拓の機会を求めに出展、来場をされます。日本からは中小企業基盤整備機構および日本貿易促進機構の傘下で全国の支援企業数社が出展しました。初日には「成熟市場におけるビジネスオポチュニティ」と題したセミナーが開催され、香港貿易発展局日本首席代表の古田茂美がモデレーター役を務める中、日本ニュービジネス協議会の池田弘会長と香港貿易発展局リサーチディレクターのニコラス・クワンが登壇し、日本を始めとしてアメリカ、ヨーロッパ等の成熟市場の現状と今後の可能性について議論されました。

WSMEE 中小企業基盤整備機構のブース

セミナー（右から：池田氏、古田氏、クワン氏）

書評　“オーストラリア歴史・地理紀行”と私の捕鯨雑感

湾仔

わが協会の麻生副理事長の著作だが、オーストラリアに縁のある人には実に面白い。日豪の交流の歴史はアメリカのペリー提督の開国要求より22年も前に徳川幕府に捕鯨船が燃料・食料の供給を求めて開国の要求を行ったとは驚きだ。山田長政も出てくるし更に南極探検隊の白瀬中尉の話、戦時中の日本軍捕虜の暴動等私の世代には生々しい話まで実によく調べて居られる。

私は文中のCape Flatteryの珪砂工場にも行ったし、若いころはビクトリア州の田舎で乳製品工場立ち上げに長期滞在したこともある。その後も何度も出張したので土地勘はあるが、所詮教養のない商人の訪豪なのでシドニー、メルボルンなど大都会の話とか、シドニーの巨大で実に旨いRock Lobsterの話とかキャンベラで佐藤大使(元香港総領事、のち国連大使)に夫婦でお世話になったこととか若し私が書けば単なる観光話になってしまう。ところが本書は移民の歴史から白豪主義、最近のアジア系の受け入れまで詳しく解説があり、流石に初代シドニー特派員として活躍された方の書なので迫力がある。

さて書評はこの程度にして私は捕鯨について触れてみたい。と言っても捕鯨の良し悪しではなく、捕鯨に熱心であった豪州が今や極端な反捕鯨団体の根拠地となった不思議についてだ。Melvilleの小説Moby-Dick(The Whale)にもアメリカの捕鯨船が1850年代に四国(原文ではShikoke)沖で捕鯨をしていた話がある。日本では肉は食用として戦後は珍重されたが、一般にはクジラの油は機械油としては最高級で欧米で使われていた。戦後捕鯨が再開され捕鯨船団が横浜に入ると貨車はすべて鯨用で一般貨物の配送に苦慮したと先輩から話を聞いたが、鯨油の輸出は缶詰の輸出とともに花形とされた時代もあったようだ。

私の頃は既に鯨油はなく魚油の欧州向け輸出が細々と続いていた。1975年頃ロンドンに転勤となり食料も見ていたのでユニリーバに挨拶に行った。丁度、イギリス最南端のブライトンで捕鯨の是非を巡る会議があり日本代表団はインキの壜を投げつけられたころだ。ユニリーバの幹部は感慨深げに今やsperm-oilというのは禁句になってしまったと開口一番私に話しかけた“油屋というのは業界ではあまり品の良くない集団で鯨油はsperm=精子、菜種油はrapeseed-oil=強姦と言っていた”。私にとっても鯨は昔話だし、魚油も日本では終わりかけていたので一つの時代の流れかなとその時の会話が印象に残っている(ユニリーバではこの油をマーガリンに使用していた)。

ところが最近になるとこれまた、元香港総領事でその後ポーランド大使となり私もポーランドで経団連ミッションなどでお世話になった上田大使が国連の人権大使となり、人権委でうっかりシャラップと相手に言ってしまい日本のマスコミに叩かれてしまった。実はこの相手と反捕鯨団体と私には重なり合う。私自身国連は相変わらずUnited Nations=旧連合軍なので頼りになるとは思っていないが、一時期ユニセフがそうであったように、ある委員会は完全に特殊な活動家に牛耳られているような気がする。上述の人権委でもそうだが日本は未だに中世の法制度から抜けていないと信じている委員もいる。彼らはこちらの説明に対しその都度自分の考えを主張するので、シャラップとも言いたくなるのだろう。反捕鯨運動も同じようなもので国連の支持を得ていると考えるべきであろう。豪州の捕鯨から妄想が発展しすぎたかも知れないが私の感想だ。

東京新聞書評（7月23日付け）

『オーストラリア　歴史・地理紀行』

ご存じですか？　ペリー来航より22年前、オーストラリアの捕鯨船が北海道に現れ松前藩と交戦したこと、はたまた「はやぶさ」帰還成功の背景には、単に「落とし場所」を提供しただけではない豪州との協力があったこと…。著者は1978年から4年間の新聞社特派員を経験、徹底した〝歩く取材〟を旨に、現地に残る「秘話」を掘り起こすことで知り得た日豪関係の歴史を生き生きと伝える。最新取材も交えた豪州の移民地図の変遷、未知の内陸部リポートも。麻生雍一郎著（新聞情報社・1680円）

TOKYO

NPO法人日本香港協会

第34回香港ビジネス懇話会開催しました

講演する松村美臣氏

今回で34回目となる香港ビジネス懇話会が、去る10月25日(金)千代田区内幸町の(財)フォーリンプレスセンタービル内にて開催されました。当日は、台風27、28号による大雨が心配されましたが、幸運にも開催にはあまり影響がなく、主催者として安堵しました。

講演は、税関OBの松村美臣氏による「AEO制度と国際物流(わが国の貿易円滑化の取り組み)」。多くの資料に基づき熱のこもったお話にて、国際貿易の仕組みの現況と今後の姿を概観でき、また香港の貿易状況を踏まえ、世界貿易の将来のスキーム、姿が認識でき有意義なひと時となりました。

このAEO(Authorized Economic Operator)という言葉は、一般にはあまりなじみの無い言葉ですが、これは、つい先ごろインドネシア・バリ島にて開催されたAPEC(アジア太平洋経済協力会議)、TPP(環太平洋経済連携協定)交渉等で新聞を賑わせている、税関などの手続き簡素化による所謂貿易円滑化の取り組みのことです。この貿易投資の更なる自由、円滑化、ビジネスの円滑化は、アジアの持続可能な成長と繁栄を獲得するため2020年のAPECボゴール目標達成評価対象にもなっており、香港も任意の対象に入っている模様です。

2001年9月11日の米国同時多発テロ発生以来、国際貿易におけるセキュリティ確保と貿易円滑化が問題となり、その両輪が不可欠との世界的課題が浮上しました。そこで税関と貿易事業者がサプライチェーンの安全性を確保するため、パートナーシップ関係を結ぶという、謂わば自発的参加による認定プログラム、認定された経済事業者制度(AEO)が策定され、国際貿易の円滑化を推進しています。現在、国際貿易は、177か国が加盟するWCO(世界税関機構)を中心に、このAEO制度によって貿易事業者が物理的、人的、さらに情報の貨物管理(セキュリティ)対策とコンプライアンス対策を講じ、税関の認定を得た優秀な貿易関連事業者には、通関含めロジスティク・ベネフィットとして様々な円滑化措置を講じる方策が採られています。認定事業者数は、米国が10,000、EUが3,500を超える中、わが国ではまだ517事業者(2006年3月～現在)であり、一方香港では、まだ5事業者(2012年4月～現在)とのことです。ひょっとすると将来は、「AEO通関士」、所謂「関税法上の通関士」が望めるかもしれません。

今後国際貿易を勝ち抜くためには、いろいろなジャンルのロジスティクを担う貿易事業者の優秀なコンプライアンス・プログラムが前提となると考えられます。詳しくは、税関ホームページをご覧下さい。

<人気レストラン香港人シェフによる広東料理実演と試食会>主催女子プロジェクト「バウヒニア会」

乾物利用の料理を学ぶ会員たち

毎回大好評の「バウヒニア会」主催、3回目のお料理教室が11月16日(土)に飯倉の「新北海園」で開催されました。

今回は”香港土産に買った乾物類を何とかしたい”というご要望にお応えして、香港の定番乾物を使ったお料理を「新北海園」総料理長・趙漢東氏にデモンストレーションして頂きました。乾物類の保存方法や選び方、調理のコツ等を詳しくレクチャーして頂き、その後ご参加くださった皆様と円卓を囲み、デモンストレーションのお料理2品、点心8品の計10品を美味しく頂きました。

「新北海園」の点心はまさに香港の味、まるで香港で飲茶をしているかのような素敵な時間でした。ご参加くださった皆様にも喜んで頂けた様で、もちろん香港についての話に花が咲き、気分もお腹も大満足、とても楽しい一日になりました。

＜今回のメニュー＞

実演

1.キクラゲと豆腐干絲の和え物
2.干しエビと春雨の炒め煮

点心

1.水晶韮菜餃　2.焼売　3.だいこんもち　4.春巻
5.鉄板水餃子　6.炒飯　7.火腿冬瓜湯
8.マンゴープリン

KANSAI

関西日本香港協会

関西日本香港協会　理事・事務局長　戒田真幸

香港･中国ビジネスセミナー開催

園田茂人教授（東京大学大学院情報学環／東京大学東洋文化研究所）

香港・中国ビジネスセミナー　会場の様子

「中国･アジア市場の特徴と拠点としての香港」

去る9月17日に香港貿易発展局、大阪商工会議所との共催で香港･中国ビジネスセミナー「中国･アジア市場の特徴と拠点としての香港」を開催し、75名の参加者を得て盛会でした。

欧米の経済が頭打ちとなり、巨大なマーケットの中国も問題山積で経済構造改革に着手している状況で、世界的にアジア圏への関心が高まっています。今回は、永年中国･アジアにおける企業文化を研究されてきた東京大学東洋文化研究所の教授、園田茂人氏に講演をお願いしました。

冒頭の開会挨拶で木全千裕会長は、完全に自由ではない中国で経済成長の低下、不動産バブル、環境汚染、格差、供給過剰など深刻な問題が発生しており、習近平体制下で李克強首相が無駄なインフラ建設や不動産投機、生産能力過剰な工場などに対する金融機関の融資を抑制する経済構造調整を重視する指導路線（リコノミクス）に触れられ、講師の園田先生も講義されている協会主催のCMMS（華人経営塾／チャイニーズマネジメント＆マーケティングスクール）の意義と香港の重要性を話されました。

園田先生は今年の8月1日に東京大学の国際センター長に就任され、グローバル人材の育成に注力されています。就任早々に夏休みを利用して「香港大学･東京大学合同サマープログラム2013」を実施されて20名の生徒が香港で実施研修を受けました。香港を代表する企業人や香港大学との交流を経験して、香港人が英語力で世界と繋がっている様子、ビジネスと文化の融合、香港に根付いている食文化、金融のグローバル化の実態、中国を利用して発展する香港企業、非常に洗練された人との付き合いと商売の仕方が長年の人の動きと歴史的な積み上げで自然に身についている、など多くのことを学んだとのことです。

講演の中で園田先生は、拠点としての香港の地政学的理解、中国へのゲートウェイ、製品･サービスのショーウインドウ、中国から年間3000万人の観光客のインパクト、アジアの中間層、日台アライアンスのモデル、香港から中国･アジア市場へ、華人社会における関係主義のモデル、などについて詳しく解説されました。最後に香港を使うことのコスト･ベネフィットをよく理解すること、ビジネスがもつ社会･文化的側面を重視すれば相互に理解し合える台湾と香港が重要であり、日本国内でビジネスモデルを練り上げて将来に備えて欲しいと強調されました。

文化部懇親行事

「ライオンキング」観劇会参加の皆様

劇団四季「ライオンキング」観劇会

関西日本香港協会では、10月18日に文化部主催による会員懇親行事として劇団四季のミュージカル「ライオンキング」の観劇会を実施し、42名と多数の会員が参加しました。ミュージカルの王様「ライオンキング」は、アフリカのサバンナを舞台にするライオンの子･シンバの成長物語です。1997年にブロードウェイで初上演されて空前のブームを巻き起こし、1998年に演劇界最高の栄誉と謳われるトミー賞で最優秀ミュージカル賞を受賞、日本でも国内通算上演回数が8000回を超え、前人未到の13年連続の無期限ロングランを更新中です。素晴らしい音楽と舞台演出に、参加者一同が感動の一日でした。

CHUKYO

中京日本香港協会

法人会員と個人会員（Ⅰ）　秋季ビジネスセミナーと愛知名所巡りの旅

中京日本香港協会　副会長・事務局長　佐藤亮一

INAX ライブミュージアムにて

春期、秋期ビジネスセミナーの内、秋期2013を9月9日（月）名古屋商工会議所第5会場にて理事会開催および議題、報告検討終了後92名の会員、一般会員のゲストを迎え2部構成の第1部講演を貿易発展局大阪事務所長伊東正裕講師により「珠江デルタ地域の一体化が進む香港のハブとしての役割」、続いて第2部として香港貨運物流業協会会長ポール･ツィー講師により「アジアの物流ハブおよび中国本土へのゲートウエイー香港」を各々開演の中、完備されたセミナー用テキストを手元に熱心に関係者また一般会員に話され13億人という巨大市場を持つ中国大陸に対するアクセス含めたアジア戦略につき香港起点とした中華圏におけるビジネスのあり方にもヒントが得られたとメモをとるゲストもかなり見受けられた。最後にアンドリュー･ツイ氏より「貿易発展局の現況及び香港貿易発展局の日程、特に展示会の商況」等法人会員にも注視されるべく喚起あり有意義に終了することが出来、いつもながら貿易発展局の手配には感謝申し上げる次第です。

一方、協会個人会員含め夏場レクリエーションとして知多周辺バスによる地図上、愛知県南部知多方面ぶらぶら散歩実施。ご存知通り知多には、四国八十八カ所詣りと並び四国直伝弘法大師、尾張八十八カ所霊場巡り、また西国三十三観音詣で（開創は明和7年）には老若男女の訪院が絶えない。産業界では、全国的知名度のあるミツカン酢の里、INAXの歴史館工場等貴重な財産、保全地区が多い。

まず、知多方面への入口半田は、小学校教科書にも登場する題材でもある今年生誕百年を迎える童話作家新美南吉著作「ごんぎつねの里」を紹介、周辺一帯田園地帯に囲まれた中に展示館あり、また三百万個以上の赤煉瓦を積んだ五階建の巨大建築物。単体の建造物としては、東京駅に次ぐ二番目の建築とされ国の有形文化財指定された「半田赤レンガ」として1898年（明治31年）ビール会社丸三麦酒後の「カブトビール」の誕生地、老年代には懐かしい響きである。即ちミツカン酢中埜又左右衛門、敷島パン盛田善平ほか知名人により造り上げられた歴史上産物である。赤レンガ同様ミツカン酢の工場歴史館を全員にて見学。実は、今年最後に耐震補強のため改修されることになっており新旧の目視者として参加者に紹介。もう一点新旧と漸次改修されてるINAX工場の歴史館では、全員にて個性ある陶器部品使った額縁造りの体験もコースに組み込み色取り取りの陶器に触れることにより見慣れた器物にも親しみが湧いたと思われる。

最後に、セントレア空港隣接している「めんたいパーク」にて各人買い物をし無事終了することが出来た。

この行事は、5年前より協会が手がけている会員特に個人会員へのサービスとして継続している行事である。普段われわれが見慣れた名古屋中部圏にも思わぬ発見が視界に飛び込んでくる旅でもあった。将来、香港や中国など近隣の国･地域からの訪問客にも案内できる地区特性の一環となれば幸いである。

Merry X'mas & Happy New Year!

会員の皆様

良い年末年始をお過ごしください

日本香港協会

KYUSHU

山形日本香港協会

講演会・会員交流会開催

九州日本香港協会事務局

九州日本香港協会名誉顧問　並田　正一 氏

講師：福岡県 企画・地域振興部総合政策課エネルギー政策室
事務主査　小川　隆司 氏

九州日本香港協会では8月28日(水)に福岡市内の中華レストラン、頤和園にて講演会・会員交流会を開催しました。九州日本香港協会発足後、このような会員同士が膝をつきあわせての交流会は初めての開催で、17名の会員が参加しました。

講演会に先立ち、当会の名誉顧問である西研グラフィックス株式会社代表取締役社長並田正一氏が挨拶されました。講演では平成22年4月から平成24年3月まで福岡県香港事務所長として香港に駐在した福岡県企画・地域振興部総合政策課エネルギー政策室事務主査小川隆司氏より「元駐在員が語る香港事情について」と題してお話しいただきました。2年間香港で小川氏が感じたさまざまな香港の文化を現地のレストラン・サービス、最低賃金、本土の中国人との関係、増加する中国人観光客、日本語スピーチコンテスト、ワインの人気と日本酒の可能性など多様な角度からお話しいただきました。当会の会員は香港に長期駐在もしくは長年取引の経験を持っているため小川氏の話に共感しながらも、新たな発見も数多くあったように感じられました。

講演に引き続き交流会が行われ、当会の会長である九州旅客鉄道株式会社取締役会長石原進氏よりこのような会を通して、会員間のより深い絆を築いてほしい、また12月の香港フォーラムに九州から多くの会員が参加してほしいと挨拶されました。その後、協同組合福岡情報ビジネス国際事業部業務推進課課長武藤洋平氏より乾杯のご発声をいただきました。

交流会の様子

歓談の際には香港と九州の歴史的な関わりや現在の香港事情について語り合い、会の雰囲気はとても盛り上がりました。閉会の挨拶として、当会の副会長である株式会社エフエム福岡代表取締役社長佐々木克氏より、6月の沖縄でのアジアフォーラムでの英語スピーチに関するエピソードをご紹介いただきました。また、今後もこのような会員間の情報交換や交流の場を年に2～3回は行っていきたいとお話しいただきました。

九州日本香港協会では会員の要望にこたえて今後も多様な形態の会員交流会や情報交換会の開催等を通じて、より親密な会になるよう努力していきたいと存じます。どうぞよろしくお願いします。

飛龍　No.75　2013年12月 発行　(禁無断転載)

日本香港協会 全国連合会

〒102-0083　東京都千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局 東京事務所内
電話(03)5210-5901　FAX(03)5210-5860

ＮＰＯ法人日本香港協会(東京)
〒102-0083　千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内　電話(03)5210-5870

関西日本香港協会
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内　電話(06)4705-7030

中京日本香港協会
〒460-0003　名古屋市中区錦2-11-27　ＴＨ錦ビル8階
株式会社喜斎内　電話(050)3620-2517

九州日本香港協会
〒812-0011　福岡市博多区博多駅前2丁目9-28　会議所ビル1階
地域企業連合会 九州連携機構 内　電話(092)451-8610

山形日本香港協会
〒990-2432　山形市荒楯町1-14-21
(株)日本不動産コンサルティング内　電話(023)633-2110

北海道日本香港協会
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-11
北洋銀行国際部内　電話(011)261-4288

宮城日本香港協会
〒980-0811　仙台市青葉区一番町3-7-23　明治安田生命仙台一番町ビル3階
(株)ＪＴＢ東北 交流文化事業部内　電話(022)212-5552

沖縄日本香港協会
〒900-0033　那覇市久米2-2-10
那覇商工会議所内　電話(098)868-3758

広島日本香港協会
〒730-0052　広島市中区千田町3-7-47　広島県情報プラザ3階
(公財)ひろしま産業振興機構　国際ビジネス支援センター内
電話(082)248-1400

新潟日本香港協会
〒951-8052　新潟市中央区下大川前通四ノ町2186番地
愛宕商事株式会社内　電話(025)365-0001

ＵＲＬ　http://www.jhks.gr.jp

HOKKAIDO

北海道日本香港協会

北海道日本香港協会 事務局

「海外おみやげ宅配便」～HOP1の取組み～

北海道土産を新鮮なまま香港へお届けします。

1.道産食品輸出の現状と課題

北海道の農水産物や加工食品は、香港をはじめとしたアジア地域において非常に人気があり、北海道の安心・安全で美味しい「食」を目的に訪れる海外観光客も多く、また各国で開催される物産展でも常に高い人気を誇っています。

食品の輸出は、大量生産が難しいことや、多品目・多頻度輸送が通常であるため、貨物ロットが小さく、1社の商品で満載(FCL)コンテナを仕立てることは難しく、小口混載貨物(LCL)輸送を利用せざるを得ません。しかし、北海道には冷蔵・冷凍の小口混載貨物の輸出を行う商社や物流業者が少ないことから、商社機能を有する道外事業者を通じて輸出しているのが現状であり、結果的に物流費のコスト高が課題となっていました。

2.北海道での新たな取り組み

このような課題を解決し、「北海道から直接輸出できる体制」を作り出すために、平成23年10月に北海道開発局と札幌大学が「国際物流を通じた道産品輸出促進研究会」を設立しました。この研究会には、フード特区機構、さっぽろ産業振興財団、北洋銀行等の各種団体・企業も参画し、産学官が連携して、「北海道国際輸送プラットホーム」(Hokkaido export Platform:略称HOP)の構築に向けて取組んできました。

さらに平成25年9月には、参加者を拡大し、31の企業・団体による「北海道国際輸送プラットホーム推進協議会」を設立し、「事業化」の具体的な実現に向けてスピードアップを図っています。

3.HOP1(ホップ・ワン)サービスの特徴

第1段階として、海外への小口貨物輸送ルートを構築するため、ダンボール1箱から手頃な価格で冷凍・冷蔵で空輸する「HOP1サービス」を、平成24年9月から香港、11月からシンガポール、さらに平成25年5月から台湾に向けて、順次開始しました。

物流コストの削減だけではなく、通関手続き等の代行を行うことで、「誰もが」、「簡単に」、「輸出」できる仕組みを構築し、道産食品の輸出拡大を目指しています。

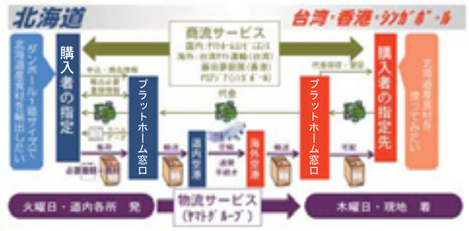
【主な特徴】

○北海道のどこからでも、香港、シンガポール、台湾の購入者の自宅や取引先の店先まで、最短2日で冷凍・冷蔵輸送が可能。

○ダンボール1箱から申込が可能で、集荷した小口貨物を集約し、1つのコンテナに混載させることで、輸送コストを削減。

○面倒な通関、検疫などの事務手続きの代行により、海外取引が初めての事業者も安心して輸出が可能。輸送保険・ＰＬ保険(生産物賠償責任保険)の付保や現地での代金回収も代行。

HOP1サービスの概要



(出典:北海道国際輸送プラットホーム推進協議会作成資料)

HOP1サービス利用料金

縦・横・高さ 合計	重さ(箱含む)	料金		
		台湾	香 港	シンガポール
120ｃｍ以内	15kg以内	9,450円	9,450円	15,750円
100ｃｍ以内	10kg以内	7,350円	7,350円	12,600円
80ｃｍ以内	5kg以内	5,250円	5,250円	9,450円

※上記料金の他に、ＨＯＰ１サービス使用手数料として販売希望価格の　９％(販売を目的としない場合は2,100円)と、シンガポール向けはVAT(付加価値税)７％、台湾向けは関税、営業税30％が必要。
(出典:北海道国際輸送プラットホーム推進協議会作成資料)

4.「海外おみやげ宅配便」の活用

海外観光客が来道し、自国へ持ち帰るお土産は、ハンドキャリーでは量に制限があり、特に冷蔵・冷凍品はほとんど持ち帰ることができませんでした。しかし、HOP1サービスを利用した「海外おみやげ宅配便」の取扱い開始により、カニなどを大量に購入できると、海外観光客に好評です。札幌市中央卸売市場にある(有)北海道特産品販売にお話を伺ったところ、香港からの観光客が圧倒的に多く、「安心・安全な北海道ブランドはいくらでも買いたい。」と、箱一杯に約４、５万円の商品を送っているそうです。

今年７月にタラバガニなど約15万円分を香港に送った20代の香港人観光客は、「今度は、クリスマスにカニ80杯、ウニやホタテ、メロン20個を送って欲しい。」と、今では常連客となっています。当社では、「２月の旧正月にどれだけ利用があるか、今から楽しみ。」と、「海外おみやげ宅配便」に大きな手応えを感じています。

5.今後の発展に向けて

現在、協議会の各企業・団体がそれぞれの得意分野を活かし、HOP1サービスを利用した事業を検討しています。海外放送を活用したテレビショッピングの実施や、インターネット販売機能を活用したさらなる小口輸送、海外バイヤーとの商談会における事前サンプル送付など、具体的な取組みの実現に向け、動き始めています。

「北海道国際輸送プラットホーム推進協議会」では、引続き産・学・官が一体となって、アジア各国への北海道食品の輸出促進に向けて取組んでいきます。

MIYAGI

宮城日本香港協会

宮城日本香港協会　事務局　武田　功

東日本大震災チャリティ・コンサート「ひびき合う心PART3」を開催しました

力強い音楽は400年前の当時の出帆を想起させました

11月1日（金）、2日（土）と2日間にわたり、東日本大震災チャリティ・コンサート「ひびき合う心PART３」として、慶長遣欧使節出帆400年を記念するサン・ファン・フェスティバル・コンサートを開催しました。

1日はレセプション会場となったメルパルク仙台5F「ソシア」で、2日は記念式典会場となったサン・ファン館で、ミュージカルなど多彩な演奏を行っている竜馬氏のバイオリン、ネイティブアメリカンフルートの奏者マーク・アキクサ氏の笛、そして囃子の名門「藤舎流」の剛氏による鼓と大太鼓、花を添えたのがダンサー知夏七未さん、パフォーマンサー松永真紀さんの踊りでした。素晴らしい音楽に、参加者の皆さん、最後までうっとりと聞きほれていました。NPO法人「美・JAPON」との共催でしたが、宮城日本香港協会の名前を広くアピールすることができました。

HKTDC FOOD EXPO 2013（美食博覧）に参加してきました

安部氏とともに受賞記念の記念撮影

8月15日から19日まで香港会議展覧中心で開催されたHKTDC FOOD EXPO に小野寺会長、そして油川理事が参加してきました。宮城県からは5ブースを出展、当協会とは姉妹関係の宮城県食品輸出協議会からも2つのブースを出展して、ジェトロの支援も受けて盛大に開催されました。小野寺会長は、香港宮城県人会の安部隆孝顧問と、同氏が経営する「安半」にて懇談、日本総領事も交えた意義深い日となり、当協会にとっても記念すべき1ページを開くことができました。

なお、この後、10月22日には日本食の海外普及に尽力されたということで農林水産大臣表彰を受けた安部隆孝氏を仙台に迎えて、受賞祝賀会を開催しました。

香港「安半」にて安部氏とともに

「蓮の花明りワークショップ」を開催しました

8月12日（月）女性部会主催の第1回文化教室「蓮の花明りワークショップ」を開催しました。指導された方は東京の「虹のけんけん」の愛称で親しまれている岩手県高田市出身の伊藤健介氏、和紙を一枚一枚丁寧に貼り付け、蓮の花びらに心を込めて作りました。丁度お盆の時期とも重なり、完成したあと、光を灯しながら、東日本大震災で亡くなられた方々へ参加者全員で哀悼の意を込めて祈りました。

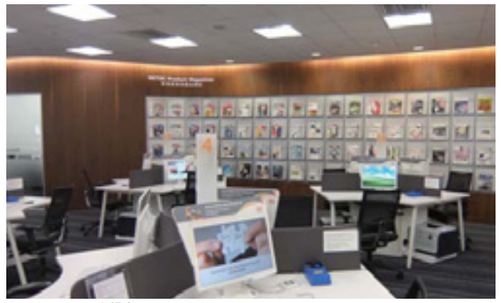
作った蓮の花を手にする会員たち

OKINAWA

沖縄日本香港協会

沖縄日本香港協会

香港で沖縄フェアー開催


ＳＭＥセンターを視察

キンバリーホテル内のレストラン

平成25年11月沖縄県議会議員マカオ・香港視察団に同行しました。

視察の目的は、①マカオにおけるカジノを含むＩＲ（統合型リゾート）施設②香港コンベンション＆エキジビションセンター③香港における沖縄県産食材の販売状況を目的に３泊４日で実施されました。香港貿易発展局大阪事務所の協力で、香港コンベンションセンター、デザインギャラリー、中小企業センターを視察することができました。

デザインギャラリーを視察

デザインギャラリーでは、香港貿易発展局が様々な商品の「デザイン」に力を注いでいて世界中小企業エキスポと併せてイノベーション・デザイン＆テクノロジーエキスポが毎年開催されていると説明を受けた。デザインギャラリーの商品は、製造業者のコンタクトが可能で、デザインの優れた商品の販路の拡大につながっています。

ＳＭＥセンター（中小企業センター）では、起業や香港へ企業進出に関して法務・財務等に関する様々な分野での中小企業の支援が行われていることが説明されました。ＳＭＥセンターでは、中小企業のセミナー等も開催されるとのことで、香港貿易発展局では、きめ細かな中小企業向けのサービスが行われていることが理解できました。

その後、沖縄県産食材の販路拡大の一環として、香港の高級ホテル「キンバリーホテル」で那覇空港におけるＡＮＡ貨物ハブを利用した沖縄県産品をＰＲする「沖縄ミーバイ・フェアー」のレストランを視察しました。ミーバイは魚のハタの一種で、沖縄では唐揚げやみそ汁の具としてよく食べられています。ホテル内の日本食レストラン「花水木」で県産ミーバイ等の鮮魚や豚肉・野菜などを香港の方々に合うように調理すると共に沖縄の食材の調理の仕方や食べ方も提案しているとのことでした。店内は、沖縄の海のポスターや沖縄の偉人達の掛け軸、紅型などが飾られ沖縄の雰囲気を演出しています。

沖縄の泡盛や県産ビールであるオリオンビールも置いてあり、沖縄の居酒屋の雰囲気が味わえます。

キンバリーホテルのビュッフェ・レストラン「コーヒーハウス」でも沖縄県産品を使った料理を提供しており、大勢の人で賑わっていました。

コーズウェイベイのクラウンプラザホテルの屋上のバーにおいても、素晴らしい眺めと雰囲気の中で、来年一月から泡盛を使ったカクテルが提供される予定です。

沖縄フェアーを通じて、沖縄の食材が多くの香港の皆様に広がることが期待されます。

（上）日本食レストランのミーバイフェア
（下）沖縄から空輸される鮮魚

HIROSHIMA

広島日本香港協会

広島日本香港協会　事務局長　川北正明

初めての海外取引セミナー＆相談会in東広島

広島日本香港協会の事務局は私ども公益財団法人ひろしま産業振興機構・国際ビジネス支援センターにあり、広島市に所在しています。香港協会の事業に限りませんが、いきおい事務所がある広島市での事業開催になっています。このため、県内の他地域の方々も事業に参加しやすいよう、昨年度は広島県東部の福山市で「香港・アジアセミナー＆相談会」を開催しました。

今年度は、県中央部に位置する東広島市（人口約19万人、広島大学があり、国際学術研究都市を標榜している）で開催することとし、地域の中核的産業支援機関である東広島商工会議所に共催を呼びかけたところ、快く承諾いただき、計画が動き出しました。

内容としては、これから海外展開をしようと考えておられる東広島市内及びその近郊の中小企業を主な参加者と想定し、①投資ルールが明確で、中国事業のゲートウェイとしての性格を有する香港のビジネス概要と、②海外販路開拓を志す際の標準的な取組み（商談会、展示会等）、の2つの講演をいただくとともに、講演後に個別相談会を実施することにしました。それぞれの講師として、①については、香港貿易発展局大阪事務所の田中洋三次長に、②については、独立行政法人中小企業基盤整備機構の南勇プロジェクトマネージャーにお願いしました。

7月26日（金）の13:30から17:30に東広島商工会議所において、「初めての海外取引セミナー＆相談会in東広島」と題して開催しました。香港貿易発展局の田中次長からは、「ダイナミックに変貌する香港のビジネス概況」と題して、香港の経済基礎情報と香港の強み、香港の活用例などを分かりやすく語っていただきました。続いて、南マネージャーからは、「アジアにおける海外販路開拓の進め方」と題して、海外販路開拓へのアプローチとしての商談会、インターネットを活用した海外取引、国際展示会などについて、情熱的な講演をいただきました。

平日だったこともあり、参加者数としては、セミナー37名、個別相談会6社と、目標を下回りましたが、参加者が、セミナー、相談会ともに非常に熱心だったのが印象的でした。

田中次長の講演風景

広島日本香港協会ビジネスセミナー

9月12日（木）の13:30から15:30で広島市内のホテルにおいて、「香港協会ビジネスセミナー」を開催しました。

講師は、香港貿易発展局大阪事務所の伊東正裕所長と、味千ラーメンを世界に展開されている重光産業株式会社の重光悦枝取締役・広報室長にお願いしました。

このセミナーを開催することになったきっかけは、2012年5月に香港貿易発展局が東京と大阪で開催された大型シンポジウム“think GLOBAL think HONG KONG”にまで遡ります。そのシンポジウムの一環で「日本ブランド対中／アジア輸出」という分科会に参加した際、パネリストの1人であった重光さんの情熱溢れる発言に強く惹かれ、「地方の中小・零細企業であっても、海外で成功する可能性は十分ある」とのメッセージを、是非、広島県内の企業の方々に聴いていただき、海外に挑戦していただきたいと思ったことが、セミナー開催の発端でした。

セミナーでは、先ず伊東所長から、「香港の食品市場と食品ハブとしての機能」と題して、日本の食品を中心にした香港の市場の特徴や香港が有する食品ビジネスの可能性などについて、具体的数値などを示して、分かりやすく説明していただきました。そのような情報を理解いただいた上で、重光取締役からは、味千ラーメンの成功の秘訣を語っていただきました。海外事業は初めから順風満帆ではなく、台湾での失敗から学んだこと、その後の味千ラーメンの成長を決定づけるパートナーとの出会い、現地の食生活に合わせたメニューづくり、個人力を持つ人材の育成、詳細なマニュアル作成、味千ブランドのストーリーの伝達、等々、中小・零細企業が海外展開する際の秘訣を詳細にご披露いただきました。

中小・零細企業が海外展開を目指す場合、様々な課題がありますが、元々は地方の小さな企業が世界的な企業にまで成長した実例があること、その秘訣を学んでいただき、1社でも多くの企業が海外に雄飛されることを祈っています。

重光取締役の講演の様子

なお、香港貿易発展局大阪事務所の伊東所長、田中次長には、お忙しい中講師をお務めいただいただけでなく、外部講師の選定など、セミナーの企画段階からアドバイスをいただき、2つのセミナーは、お2人のご尽力なくしては実施できなかったものであり、紙面をお借りして伊東所長、田中次長に厚くお礼を申し上げます。

NIIGATA

新潟日本香港協会

新潟日本香港協会　理事　齋藤吉平

新潟県酒造組合が「香港インターナショナル・ワイン＆スピリッツ・フェア2013」に参加

齋藤吉平会長、ベンジャミンチャウ副総裁、石井哲也首席領事

「香港インターナショナル・ワイン＆スピリッツ・フェア2013」出展の様子

新潟県酒造組合（会長・齋藤吉平）では、11月7日（木）～9日（土）「香港インターナショナル・ワイン＆スピリッツ・フェア2013」に、29社が出展参加致しました。会場は、香港の中心に位置し、中国返還セレモニーの舞台となった場所にある「香港コンベンション＆エキシビション・センター（HKCEC）」です。

新潟県酒造組合としては、昨年のシンガポール・イベントに次ぐ第2回目の海外イベントでしたが、現在、我が国の「日本再興戦略（Japan is Back）」政策の中で、日本酒も重要な品目の一つとなっております。このような折、私たちは、高品質でプレミアム感のある「新潟清酒」を、世界から集まったバイヤーに紹介する事が出来ました。また、質の高い商談も行われ、今後の海外展開にも大いに期待したいと思います。

初日には、新潟県醸造試験場のご協力も得て、「新潟清酒テイスティング」を開催し、これもまた耳目を集めました。二日目には、香港で最も美しい眺望のレストラン「View 62」で、新潟県で毎年開催されている評判の「にいがた酒の陣」の香港版、「ミニにいがた酒の陣in香港」を開催、スペイン料理と新潟清酒のマリアージュを約250名のご来場者の皆様から楽しんで頂きました。この催しの規模は、香港で行われた酒ディナーでは過去最大であるとの称賛のお話も頂戴し、参加者一同大変嬉しく思っております。

そして最終日には、一般入場者も含めた多くの皆様が重厚感ある「新潟清酒ブース」に来場され、新潟清酒を充分に堪能していただきました。また、新潟県観光局広域・国際観光室の一行とも協働し、「新潟清酒」「にいがた酒の陣2014」「食をはじめとする本県観光資源の素晴らしさと酒蔵ツーリズム」も宣伝することができました。今回のイベントをきっかけに、香港や中国から新潟県へのインバウンド観光にも、大いに寄与できたら嬉しい限りです。

終りに、今回の成功は、香港貿易発展局の関係者各位のご支援の賜物と心より感謝しております。大変ありがとうございました。